

資 料

パーソナリティ判断の安定性と測定条件の影響

齋 藤 耕 二*

問題と目的

対人知覚の研究において、対象となった個人のパーソナリティについての判断が従属変数として取り上げられることが多い。しかし判断が形成される過程で利用される手がかりは複雑な上、多義的なことが多く、判断と用いられた手がかりの関係を明確にすることが困難である。こうした問題の解決には、刺激の客観化と実験操作が有効であり、このため刺激として、写真や映画という視覚的媒体がよく用いられている。

こうした視覚的媒体を利用した実験では、実際に具体的な対象者を観察したり、あるいは相互作用を行ったりする場合に比べて、対象者についての判断に利用できる情報の量や質において大きな制約がある。こうした制約はまた実験の結果から導かれた結論を一般化することを難しくしている。

Thornton (1943, 1944) は、当時の写真を用いたパーソナリティ判断の実験に対して、判断の違いに対応する写真上での差異を見出そうとする手続の論理的誤りを指摘している。彼は、微笑している一真面目な表情をしている、メガネをかけている一かけていない、写真が明るく焼付けられている一暗く焼付けられているという3条件に応じた写真を作成し、これを刺激として対象者のパーソナリティについての判断を検討している。この実験において、微笑していたり、あるいはメガネをかけている対象者は、それぞれ特有なパーソナリティ特性を持っていると判断されることが明らかにされている。

しかし、Argyle と McHenry (1971) は、Thornton の前述した研究で見出された、メガネをかけた個人はそうでない個人より知能が高く判断されるという効果に疑問を持ち、こうしたメガネの効果が対象者に関する情報が不十分な条件の時に限定されることを確認する実験を行っている。この実験において、静止写真を刺激とした時

には、メガネをかけた対象者はかけていない対象者よりも知能が高く判断されている。しかし対象者の面接中の姿を撮影したビデオ・テープを刺激として用いた時には、評定された知能の高さに差が見出されなかった。メガネをかけている、いないと静止写真、ビデオ・テープといった呈示様式の間の変異作用の有意性は、このことから静止写真でのメガネ要因の水準間の差によって説明できることになる。Argyle らはこの結果から、写真を刺激とした対人知覚の研究においては、その結論を一般化するに当たっては、大きな制約があり、慎重でなければならないと主張している。

類似した手続に従いながら、メガネ、呈示要因の他に、被験者、対象者の性を要因として加え、さらに知能をふくめた、25特性についてパーソナリティ判断を測定した斎藤(1978a)の実験では、Argyle らと一致する結果が得られていない。メガネ要因は多くの特性で有意であり、我国においてもメガネをかけている対象者はかけていない者より、知能が高く判断されている。しかし、呈示要因とメガネ要因の変異作用は有意でなく、呈示様式の変化に伴う情報の増加がメガネの効果を必ずしも打消すものでないことを明らかにしている。

Argyle らおよび斎藤の研究はともに実験的に操作された変数を要因とする分散分析によって、これら要因の効果を検討している。そこで分析されているのは、パーソナリティ判断での測定値の同時的な変動であって、1度形成された判断がその後の時間的経過に伴ってどのように変化するかという問題は取り上げられていない。

このため、本研究では視点を変えて、次のことを目的とした。

1) 実験条件のもとで形成されたパーソナリティ判断の安定性を測定する。対象者についての情報に制約があり、また、対象者との接触や相互作用が、視覚的媒体を通しての間接的なものに限定されている実験条件のもとで形成されたパーソナリティ判断の安定性は、日常生活の中で形成されたパーソナリティ判断に比較すると著し

* 東京学芸大学

く低いことが予想される。斎藤(1978 b)は、自己のパーソナリティについての判断の安定性を測定する実験を行っているので、そこでの結果と本実験の結果を比較することによって、もっとも多くの情報に基づいて形成されたと考えられる自己のパーソナリティについての判断と間接的で、制約された情報を基礎とする他者のパーソナリティの判断の安定性の差異を検討することができる。

2) 一定の時間間隔をおいた前後2回の測定から導かれるパーソナリティ判断の時間的変化は、当然のことながら、判断の測定に用いられる刺激、手続によって影響される。Argyleら(1971)と斎藤(1978a)が問題としたメガネと呈示要因のパーソナリティ判断の時間的変化に及ぼす効果を検討するために、本研究では第2回目の測定に用いられる刺激を前記2要因について変化させている。この際、刺激条件の効果としての、前後の測定における尺度値の変動には、判断の水準と分散の両方の変化が含まれることになる。刺激条件それ自体の違いによる水準と分散についての検討はすでに斎藤(1978 a)によってなされているので、本研究では、前後の判断間の対応のみが従属変数として取り上げられている。そしてこの対応関係の程度を、同一測定条件の反復によって求められたパーソナリティ判断の安定性と比較することによって、メガネ要因と呈示要因の作用を明らかにすることを目的としている。

方 法

対象者：パーソナリティ判断の対象となった対象者は、20歳から23歳までの大学生で、男女それぞれ4名からなる8名である。彼らは、彼らのパーソナリティ、生育歴などについての資料を得るための約1時間の面接を受けている。そしてこの面接実施中に正面やや左よりから上半身を、メガネ着用と非着用の2条件において、静止写真と8mm映画によって撮影した。

刺激：この実験においては、被験者に与えられる刺激は、全てビデオ・テープによってテレビ画面上に提示された。4種類のビデオ・テープがこの実験で用いられているが、それぞれのテープは、8名の対象者全員を含んでいる。各対象者は、呈示条件（映画で3分間呈示、静止写真で15秒呈示）とメガネ条件（メガネをかける、メガネをかけない）の組合せのいずれかの状態で、ビデオ・テープに録画されている。対象者についての刺激条件の組合せは、各テープによって異なるように作られているので、ビデオ・テープの組合せによって、第1回と第2回目の提示では、対象者の呈示条件のみ、メガネ条件のみ、呈示条件とメガネ条件の両方が変化するように配

置されている。

パーソナリティ判断の測定：対象者についてのパーソナリティ判断は、斎藤(1978a, 1978b)が用いた次の25尺度によって測定されている。これらの尺度では両極を特性語で表現した連続体にそった7段階で、評定がなされている。

1 鈍感な—敏感な, 2 短気な—気長な, 3 陽気な—陰気な, 4 勤勉な—怠惰な, 5 知能の低い—知能の高い, 6 感情的な—理性的な, 7 厳しい—やさしい, 8 強気な—弱気な, 9 かたい—やわらかい, 10 素直な—強情な, 11 頼りない—頼もしい, 12 不誠実な—誠実な, 13 親切な—不親切な, 14 無責任な—責任感のある, 15 消極的な—積極的な, 16 信じ易い—懐疑的な, 17 ひかえめな—でしゃばりな, 18 冷静な—情熱的な, 19 慎重な—軽率な, 20 きちんとした—だらいのない, 21 開放的な—閉鎖的な, 22 元気な—病弱な, 23 無気力な—意欲的な, 24 自分勝手な—思いやりのある, 25 臆病な—勇敢な。

被験者：被験者は全員、教育心理学もしくは発達心理学の講義に出席している国立大学学生である。被験者は出席している講義のクラスを単位として、再テストで提示されるビデオ・テープの種類に対応する次の4群に割当てられている。

第1群 72名（男子13名、女子59名）同一テープの反復

第2群 42名（男子9名、女子33名）メガネ条件の変化

（例えば第1回目のテープでメガネをかけていた対象者は、第2回目のテープでは、メガネをかけていない。あるいはこの逆。その他の条件は不変）

第3群 34名（男子20名、女子14名）呈示条件の変化

（例えば第1回目のテープで映画で3分間呈示された対象者は、第2回目のテープでは、静止写真で15秒呈示される。あるいはこの逆。その他の条件は不変）

第4群 41名（男子14名、女子27名）メガネ・呈示両条件の変化

（例えば第1回目にメガネをかけ、映画で3分間呈示された対象者は、2回目にはメガネをかけずに、静止写真で15秒呈示される）

手続：被験者はテレビ画面に映っている対象者像を、呈示時間の間注視した後、前述した25尺度によって、対象者のパーソナリティを評定する。被験者群全員の評定が終了した後、次の対象者の像を呈示して同様な手続を行い、8名の対象者全てについての評定がすむまでくり返した。

全被験者群は、初回には同一ビデオ・テープが提示され、3週間後に各群の実験条件に応じたビデオテープが提示された。

結果と考察

前後2回のパーソナリティ判断間の対応を示すために、同一対象者に対する同一尺度での評定値間の積率相関係数を各被験群別に算出した。すなわち各群において、8対象者と25尺度の組合せに応じる、200の相関係数が求められている。

1) 被験者の男一女差：第1群では、パーソナリティ判断の安定性の測定が目的とされたため、他の群に比べて多くの被験者を当てることが意図された。しかし第2群より第4群までは、ほぼ同数の被験者をもって構成しようとしたが、前後2回の測定間で被験者の脱落が生じたため、各群の人数に差が生じてしまった。また各群における性比にもかなり差があるので、被験者の性による影響を検討するため、第1群を男子と女子に2分して、それぞれごとに相関係数を算出し、これをZ変換して男一女差を検定してみた。その結果、200の相関係数の内、5.5パーセントに当たる11の相関係数で有意差が見出された。しかし、対象者、尺度のいずれの方向においても、これらの有意な男一女差は一貫した傾向を示していない。

このため8名の対象者を込みにして、尺度についての平均を求め、その男一女差を検定した結果では有意な差は見出されなかった。このことから前後のパーソナリティ判断間での対応についての男一女差は無視し得るものと考えられる。

2) 対象者間の差：本実験でパーソナリティ判断の対象になったのは、男子4名、女子4名であるが、刺激として用いられたビデオ・テープでは、各2水準からなる呈示、メガネ条件の組合せに、男、女各1名が割り当てられている。従って対象者の性を条件に入れると、1条件1名の対象者という刺激の構成になっていて、同一条件についての繰返しは存在しないことになる。このことは見出された結果を一般化することを困難にするので、対象者について、尺度ごとの相関係数の平均を算出した。TABLE 1は、こうした対象者別平均相関係数を示したもので、同一被験者群内での対象者間差は大きなものではない。

第1群について、各4名の男、女対象者群別に、平均相関係数を計算してみると、男、女それぞれ $r=.418$ と $.377$ となり、対象者の性によって、前後のパーソナリティ判断間の相関には差がないと見てよいであろう。

また、前後とも4名のメガネをかけている対象者とメ

TABLE 1 対象者別平均相関係数

被験者 対象者	1 同一条件	2 メガネ条件 の変化	3 呈示条件 の変化	4 メガネ・ 呈示両条件 の変化
A	.334	.270	.219	.184
B	.481	.344	.273	.110
C	.420	.328	.133	.068
D	.431	.245	.336	.096
E	.374	.233	.279	.115
F	.379	.287	.278	.027
G	.410	.442	.148	.142
H	.344	.306	.295	.028

ガネをかけていない対象者についての平均は、それぞれ $r=.371$ と $.423$ であり、映画で呈示された対象者と写真で呈示された対象者では、 $r=.394$ と $.402$ であって、ここでも差は認められない。

第2群ではメガネ条件が前後の測定で変化しているが、4名の対象者ではメガネをかけている状態へ、他の4名では逆方向への変化がなされている。これらの対象者別に相関係数の平均を求めて見ると、それぞれ $r=.264$ と $.351$ となる。

第3群では、呈示条件が映画から写真へと変化した対象者の平均は、 $r=.263$ であるが、逆の、写真から映画へと変化した対象者での平均は $r=.230$ で、差はわずかである。

第4群では、メガネ条件と呈示条件の両方が変化しているため、4方向の変化が含まれており、各変化にはそれぞれ2名の対象者が割当てられている。メガネをかけた映画からメガネなしの写真への変化での平均は、 $r=.150$ 、逆のメガネなしの写真からメガネをかけた映画では $r=.106$ となっている。また、メガネをかけた写真から、メガネなしの映画では $r=.062$ で、逆方向の変化であるメガネなしの映画からメガネをかけた写真では $r=.069$ となっている。このように刺激条件の変化の方向による差はごく僅かである。

このように、平均値から見る限り、第1群から第4群まで、同一な被験者群内での刺激条件に対応する対象者間の差はごく僅かであり、しかもそれが同一被験者に基づいている相関係数間の差であるから、対象者間の差は無視してよいであろう。

3) 被験者群の差：TABLE 2は前後2回のパーソナリティ判断について、各被験者群（第2回目の測定条件）ごとに、対象者を込みにして相関係数の分布、最大値、最小値、中央値、平均値を示したものである。

TABLE 2 各被験者群での相関係数の分布

被験者群 再テスト 条件 相関係数	1 (n=72)	2 (n=42)	3 (n=34)	4 (n=41)
	同一 条件	メ 件 ガ の ネ 変 条 化	呈 の 示 変 化 件	メ 呈 両 の ガ 示 条 変 ネ 件 化
.700～.799	1	2	1	
.600～.699	9	6	3	
.500～.599	31	15	11	2
.400～.499	55	31	19	4
.300～.399	60	49	40	18
.200～.299	26	37	46	29
.100～.199	15	35	33	46
.000～.099	3	18	27	45
-.100～-.001		7	10	30
-.200～-.101			8	17
-.300～-.201			2	6
-.400～-.301				2
-.500～-.401				1
最 大 値	.715	.719	.710	.575
最 小 値	.066	-.093	-.239	-.405
中 央 値	.390	.308	.253	.100
平 均	.398**	.309*	.247	.097

** 1%水準で有意

* 5%水準で有意

各群における5パーセント水準を越える有意な相関係数の全相関係数に対する比率は、第1群より第4群へと、89パーセント、51パーセント、29.5パーセント、11.5パーセントと低下している。また中央値、平均値とも同様に第1群から第4群へと低下する傾向を示している。

相関係数の分布と4被験者群に割当てた実験条件間の関連を見るため、TABLE 2の相関係数の分布の、上の2行と下の5行をそれぞれ隣の行に加えた4×6分割表について、連関係数を求めてみると、 $c=.492$ ($\chi^2=256$, $df=15$, $P<.01$) となり、両者の間に有意な連関が存在している。

各群の平均値間の差の有意性を検討すると、第1群と第2群、第1群と第3群、第2群と第3群、第3群と第4群の間には有意な差は認められなかった。しかし第1群と第4群間 (正規偏差 $d=3.208$, $P<.01$) と第2群と第4群間 (正規偏差 $d=2.198$, $P<.05$) でのみ有意な差が見出されている。同一対象者についての前後2回のパーソナリティ判断間の対応は、メガネ条件と呈示条

件の両方が同時に変化した時に有意に低下するが、メガネあるいは呈示条件のいずれかが単独に変化しただけでは、有意な対応の低下が生じないことがわかる。

第1群のメガネをかけている条件での反復と第2群のメガネをかけているからかけていないへの変化を比較しても、相関係数の平均値は、 $r=.372$ から $.264$ へ、逆方向での変化では、 $r=.423$ から $.367$ へと低下しているが、いずれの差も有意水準に達していない。

また同様に、第1群の映画での反復と、第3群の映画から写真への呈示変化を比較しても、相関係数の平均値は、 $r=.393$ から、 $.263$ へ、あるいは、 $.407$ から $.235$ へと低くなる傾向を示しているが、いずれの差も有意水準に達していない。

このように平均値の比較においては、メガネ条件と呈示条件の変化の影響の相対的大きさの差について結論を下すことはできないが、TABLE 2における第2群と第3群の相関係数の分布、中央値、平均値は、いずれも呈示条件の変化の方がメガネ条件の変化よりも前後2回のパーソナリティ判断間の対応を低下させる傾向が強いことを示している。そして第2群と第4群間には有意差があっても、第3群と第4群の間には有意差が見出せなかったことからすると、呈示条件の変化の方がメガネ条件よりもパーソナリティ判断の時間的変化に及ぼす影響が大きいことが示唆される。

斎藤 (1978a) は、同一ビデオ・テープを刺激として、同一25尺度でのパーソナリティ判断に及ぼすメガネと呈示要因の効果を検討している。25尺度中メガネ要因は13尺度で有意であったのに、呈示要因は7尺度で有意であったにすぎなかった。このことからここで用いられた25尺度で測られるパーソナリティ判断ではメガネ条件の変化が、呈示条件の変化よりも大きな影響を持つことが予想されていた。しかし本実験の結果は統計的に有意とはならなかったが、むしろ呈示条件の効果がメガネ条件より大きい傾向を示している。分析の対象や手続が異なるため、結果を直接比較することはできないが、本実験の結果は同一要因であっても、パーソナリティ判断の形成過程とその再認の過程では効果が異なる可能性を示唆している。

4) パーソナリティ判断の安定性：本実験の第1群について、対象者を被験者に組み込んで各尺度についての前後の評定値間の相関係数を求めて見た。一方、斎藤 (1978b) は、103名の被験者について、本実験と同一尺度

を用いて、自己のパーソナリティについての判断を、3週間の間隔でくり返し測定している。そしてその結果から、尺度ごとの前後の判断間の相関係数を算出している。

この2種の相関係数を尺度ごとに比較したところ、25尺度中、尺度3を除いた24尺度において実験的条件のもとで形成されたパーソナリティ判断の安定性は、自己のパーソナリティについての安定性よりも低い値を示していた。サイン・テストによると、この2種の相関係数群間の差は1パーセント水準で有意であった。また平均値を求めてみると、本実験の第1群より求められた他者のパーソナリティ判断では $r=.489$ であるのに、自己のパーソナリティの判断では $r=.658$ であって、この平均値間の差は統計的に有意であった（正規偏差 $d=2.309$, $P<.05$ ）。

さらに各尺度別に2群間の差を検定した結果でも、尺度1, 6, 7, 8, 10, 11, 14, 15, 16, 17, 18, 20, 21, 25の尺度において、自己のパーソナリティについての判断の方が5パーセント水準を越えて有意に安定性が高く、逆方向での有意な差は全く見出されなかった。

このことからより多くの情報に基づく自己のパーソナリティについての判断は、実験的な条件下で、視覚的媒体を通して提示された、制約された情報を基礎とするパーソナリティに比較して、より安定していると結論することができる。

要 約

パーソナリティ判断の安定性を測定し、また再測定における刺激条件の変化が前後の判断間の対応関係に及ぼす影響を検討することを目的として実験を行った。刺激として用いられた4本のビデオ・テープでは、対象者はメガネ条件（メガネをかけている、いない）、呈示条件（映画で3分間呈示、静止写真で15秒間呈示）の組合せに従って録画されている。このビデオ・テープを組合せて、同一条件の反復、メガネ条件のみの変化、呈示条件

のみの変化、メガネ・呈示両条件の変化という4条件のもとで、3週間の間隔で、同一対象者のパーソナリティについての判断を25尺度を用いて測定した。前後の判断間の対応を相関係数をもって表わしたが、この相関は同一条件の反復からメガネ・呈示両条件の変化への順に低下する傾向が見出され、同一条件の反復とメガネ・呈示両条件の変化間、メガネ条件の変化とメガネ・呈示両条件の変化間には有意な差が認められた。

また自己のパーソナリティについての判断の安定性と、本実験で測定された同一条件のもとでのパーソナリティ判断についての安定性を比較した結果、実験的条件のもとでのパーソナリティ判断は著しく安定性が低いことが明らかとなった。

文 献

- Argyle, M., & McHenry, R. 1971 Do spectacles really affect judgements of intelligence?. *Brit. J. soc. clin. Psychol.*, 10, 27-29
- 斉藤耕二 1978a パーソナリティ判断の実験的研究——メガネ着用効果の検討を中心に——*実験社会心理学研究*, 17, 121-127
- 斉藤耕二 1978b パーソナリティ判断尺度の信頼性——自己のパーソナリティについての判断の安定性——*東京学芸大学紀要*, 第I部門 教育科学 第29集 142-146
- Thornton, G.R. 1943 The effect upon judgements of personality traits of varying a single factor in a photograph. *J. soc. Psychol.*, 18, 127-148
- Thornton, G.R. 1944 The effect of wearing glasses upon judgements of personality traits of person seen briefly. *J. appl. Psychol.*, 28, 203-207

(1977年10月28日 受稿)